

女学生のイメージ

—表現する言葉の移り変わり—

香川 由紀子

キーワード 女学生、生意気／お転婆、活発、乙女気、外来語表現

はじめに

「女学生」とはいつ頃から登場したのであろうか。教育制度から見ると、明治以前にも藩学で女子を教えたり、寺子屋で庶民の女子に教育を授けたりするなど、学問する若い女性の姿は見られなかったわけではない。明治5年に学制が発布され、私塾が次々にでき始めると、この私塾に通学する女子が「蛮カラ女学生」などと呼ばれるようになり、ここに「女学生」が登場する。この頃から女学塾、キリスト教主義女学校、公立女学校が設立され、明治15年頃までに確立した儒教的女子教育は、明治20年頃までの欧化主義隆盛、その後の衰退といった世の中の変化に合わせて、その趣旨も次々と変えられていく。明治30年代以降は女学生をテーマとする小説も多く書かれ、この時期あたりから女学生の存在が広く認められるようになったと言えるだろう。

女学生の存在は、世間の新しい女性への期待を象徴する一方で、「慎みがない」、「墮落女学生」などといったマイナスのイメージとも背中合わせであった。理想の女学生像は、常に世間の動きに合わせて打ち出されるのである。世間は様々な女学生像を作り上げようとし、また女学生当人たちは世間の目を受けてその枠組みと折り合いをつけながら、彼女たちなりにこの期間を謳歌しようとした。本稿ではまず、明治20年前後の欧化主義隆盛と衰退の時期に注目し、西洋の教育を受け西洋文化を摂取していた女学生のイメージがどのように移り変わっていくのか、その様子を探りたい。

「生意気」と「お転婆」

人に求められる魅力としては、「動的」と「静的」との両面が挙げられるが、特に若い女性に対しては古くからジェンダー規範が強く定められていたこと

は、彼女たちを表現する多くの言葉の持つある種の傾向からも見て取れよう。例えば、動的な面を表す言葉としては、「おきゃん」、「おちゃっぴい」、「お転婆」、「はねっかえり（ハネ）」などがある。一方、静的な面を表す言葉としては「柔和」、「お従順しい／温順しい／大人しい」、「温藉」などがある。

柔和で無口と見えるが馴れて見ると存外ハネで饒舌で有ツたり（後略）
（饗庭篁村『藪椿』、明治20年）下線引用者、以下同様

杉田の妹ハ負けるのが嫌で、そしてまた大人しく見えるとか…
（美妙齋主人『花ぐるま』、明治21～22年）

このように小説の中でも、「静」と「動」それぞれの性格を表すのに使用されている。

ところで、現在刊行されている『女と男の日本語辞典』（佐々木瑞枝、2000、2003）は、近代から形作られてきた言葉、男女の日本語の差異のニュアンスを、歴史の流れで捉えることを目的としており、女性に期待される性格を示す語として「はねっかえり」、「おきゃん」、「蓮っ葉」、「お転婆」、「たしなみ」などを挙げている。「はねっかえり」や「蓮っ葉」はマイナスイメージと捉えられ、¹「おきゃん」は「俠」であれば男気を表しプラスイメージになるものが、女性には「お」をつけて「お俠」とすることで茶化されると述べられている。また「おきゃん」を言い換えれば「お転婆」だが、ここには「女性の義侠心」は含まれないと定義され、少年の「腕白」は歓迎であっても「お転婆」はそうではないとされている。つまり女性の動的な面を示す言葉には、マイナスイメージの方が大きいと言えよう。

これらの言葉は、佐々木も述べているように、ジェネレーションによって理解の仕方が異なり、現代のフィルターをかければプラスイメージとして捉えられるものも多い。しかし、これらの言葉が頻繁に使用されていた近代の時点で、既にその評価の分れは生じていると考えられる。上記の言葉の大部分は明治に入る前から使用されていたものであるが、明治20年前後は、ジェンダー規範の枠組みが大きく揺れ動いた時期であり、女学生を表す言葉も変化している。その代表的なものと言えるのが「生意気」と「お転婆」の言葉であろう。この二つの言葉は、明治時代の女学生を形容するのに最も多く使用されると言ってもよい重要な言葉である。

「生意気」とは、現代においては、意気だった言動をすること、ふさわしい身分や年齢でないのに出すぎた言動をすることを指す。²「生意気ざかりの十七八

より五人組」と『たけくらべ』（樋口一葉、明治28年）にも登場するが、もともと男女を問わず使用される言葉である。この言葉が、学校教育を受けた男性に対して、批判的な言葉として使われているのが見える。

チト学問が出来てくると。忽地自分極の木の葉天狗。(中略)鯰気取の生意気書生が。

(坪内逍遙『一読三嘆 当世書生氣質』、明治18年)

高い教育を受けた者がそれをひけらかしているという場合、あるいはたとえ事実はそうでなくとも彼らの言動を快く思わない場合に批判する言葉として使用される。そして、「生意気」という言葉の持つこの性質は、女子教育機関が設立され、従来とは違った女性の育成を行い始めた時期にその教育を受けた女学生をそのまま指し示すものとなるのである。

女性の教育に関して触れておくと、女学塾では、明治8年、国語、漢文、和歌などを教えた跡見女塾、キリスト教主義女学校では明治3年にフェリス、明治4年に共立、神戸女学院などが設立されており、家庭で必要とされる教養以外の学問を身につける場所が次々に現れた。明治16年に鹿鳴館が完成して、表面的、風俗上の変革が行なわれるようになると、明治17年の東洋英和、明治21年の東京女学館設立にも見られるように、西欧志向の女子教育が展開される。英語を学び、洋服を着用し、西洋教師と共に生活して洋食を食すなど、欧米の雰囲気そのまま伝えるキリスト教主義女学校が人気となる。このような教育を受けられる者は、まだ限られた少数の上流の子女³であれば、彼女たちに向けられる目は自然と「出すぎた言動をする者」、つまり「生意気」というものになったであろう。

一方「お転婆」という言葉は、もともと女性のみで使用された言葉であり、つつしみや恥じらいに乏しく活発に動き回るという意味を持つ。語源はオランダ語ontembaar（馴らす事のできない）、あるいは御伝馬（よく跳ね回る）とも言われているが、人情本や歌舞伎などにも見られ、江戸時代から使用されていた。しかし、明治に入ってから「お転婆」という言葉で頻りに表現される女性像には、やはり近代教育を受けているという要素が含まれているようにみえる。

弾性質に世界の酸素を交て。「お転婆」といふ化合物になつたのなんざア好ない。

(三宅花圃『藪の鶯』、明治21年)

これは若い男性が「好みの女房」について語っている場面である。この科白内では、「まんざら文盲でも困るが」、「踏舞の上手より毛糸あみの手内職をして」いる女性の方がよいとも語られている。鹿鳴館外交の一端を担う女性を育成するため授業に舞踏を取り入れ、体操、散歩など体を動かすことが健康によいと説くとともに、西欧志向的女子教育は、賛美歌から始まって西洋音楽を取り入れ歌を歌うことも奨励した。西洋の考え方による動的な面が引き出される教育が行なわれたのである。この科白からは、勢いのよい性質が備わった女性に、このような教育が加えられることによって「お転婆」が作り上げられるのだという考えが読み取れる。

『女学雑誌』における発言

女学生のイメージとは、彼女たちが自ら発達させていった文化・風俗の結果形成されたイメージももちろんあるだろうが、始めのうちは教育の指導者やメディアによって枠組みが作られた部分も多分にあっただろう。ここで、指導者たちは女学生に対する世間の評価とどのように向き合い、どのような理想の女学生像を提示しようとしていたのか、雑誌を通して見ていきたい。

女性向け雑誌の筆頭に挙げられるものに、明治18年に創刊された『女学雑誌』⁴がある。ここには女学生の登場する小説がいくつか掲載されているが、の中で、発刊に関わり女学⁵を推進した巖本善治も月の舎しのぶ(主人)の名で、『梅香女史の伝』(明治18年8月～19年8月)、『薔薇の香』(明治20年7月～11月)、『白蓮談』(明治21年1月)、『哲女の巻』(明治21年8月～12月)などを書いている。ここでは、勉学に邁進して女学を広めるために貢献しようとする女学生、また、精神的な相互理解を第一とする男女交際を求めて悩む女学生が、英語交じりのおしゃべりや着飾ることを楽しんだり学友と交流したりする生活環境の中に置かれ、他の女学生たちと対比して描かれる。⁶彼女たちの迷う姿を示すことが主眼で、幸せな結末とは何であるかの確定的な答は用意されていない。しかし、いずれにしても、読者に示したい理想の女学生像とは、巖本のキリスト教精神とホーム論に裏打ちされた、悩み、考え、向上しようとする女学生であることは間違いない。特に、『女学雑誌』発行の主旨が、女性が学問すること、自立することの大切さを説くことにあったように、この点については小説の中でも強調されている。

例えば、巖本は『梅香女史の伝』の主人公、梅には心中を「我国一の学校すら尚ほ男子の愛を受けて之に**お**び仕へんことのみを望とする人々多し況して其

他の女子等に如何で改革の志あらん（中略）日本全国の婦女姉妹をかゝる哀の境界より救ひ出して千早振る神のまことの御心に適ふ男女の平等互愛を我が全国に行はらせて置かんやハ」と語らせ、洋婦人の帰国に伴い米国に渡る結末を用意した。また、『薔薇の香』の光は読書好きの勉強家で、『哲女の巻』の哲は大学入学を許可してもらおうと勉学に励む女学生である。

このような性質の小説であれば、世間の一般的な「生意気」のマイナスイメージについてはこれに反論するものとなる。巖本の小説の中で、「生意気」という言葉は、以下のように使用されている。

少し弁を揮へバ生意気の女だと申して尋常の婦人にハ少しも感じがなく亭主は気儘なことをしてはならむなど、禁じる斗りで助けては呉ません欧米程に婦人が進みましたら学問もまた入用になりませうが……

（月の舎主人『梅香女史の傳』、明治18～19年）

このように、若い女性が無かを主張しようとすればすぐに「生意気」という言葉でかたづけられてしまうことを嘆く文脈にある。

女学生イコール「生意気」であり、それがマイナスイメージとして定着してしまうことは女学の衰退につながりかねない。これを懸念してか、『女学雑誌』ではこのことに関して、小説を通してだけでなくさらに直接的に反論する記事を載せている。次の文章は、「多年の学窓に一個の理想を立て、これこれの丈夫でなければ独身を通す」という娘と、縁談を取り決めようとする父母について述べているものである。

父は之を命ず、母は之を諭す。泣いて、衷心を訴ふれば、そは、明治女学生の生意気なりと叱らる。

（「婚姻論」『女学雑誌』277号、明治24年）

父母が縁談を勧めるのには、世間が「僅かの学問に心奢って、過分の注文をするから独身なのだ」とか、「娘の学問をえさに親がよい所に嫁がせようとしているのだ」⁷などと噂するのを遺憾に感じていることもある。このことから見ても、女学生の学問が歓迎されていない様子がかがえるが、これに反論すれば、なお「生意気なり」と叱られるのである。

こういった発言は、「生意気」という言葉だけにとらわれて女学が衰退しないよう、圧制結婚などの旧弊に泣く女性や、学問する意欲のある女学生の気持ちを代弁しているようであるが、これらの記事に先立って、中島とし子⁸が『女学

雑誌』上に「生意気論」と題し、世間の「生意気な女学生」のイメージに対して述べた反論がある。まず、

素よりこの二三女学校の女学生を以て他の多くを代表するには非れどこのほむべき女学生に対する毎に如何なれば当時一般に女学生が非難を蒙る事ぞと余は疑がひと残念とに堪へざるなり。而してこの非難は大抵生意気なりとの総括したる一語最も勢力を占むるものの如し。然れども名珠瓦礫共に同一様の評語を蒙らすは甚迷惑の至りならずや。

(「生意気論」『女学雑誌』241号、明治23年)

と、多くの女学生が「生意気」という一語で括られ、否定的イメージで評されることを嘆いている。そして、「生意気」とはどういうことを指すのかと問いかける。世間は何を以って「生意気なりと為すか」と、とし子が問うている事柄は以下の通りである。

- ・女学生が縁日店の猿が果実に対しての如くお辞儀せざる
- ・人の物問ふとき答の濁らざる
- ・疑はしき事あれば問ふに躊躇せざる
- ・会合等に無遠慮に出掛る
- ・友人同志の相訪問する屢々なる
- ・漢語英語交りに談話する
- ・女権拡張説を唱ふ

しかし、生意気だという目をもってすれば何でも生意気に見える。つまり、「女学生は生意気だ」という考えが先にあるために、女学生のすることがすべて好ましくないことになってしまうのだと述べている。

次に、「生意気」という言葉自体について、なぜ悪いイメージで語られるのかと疑問を投げかける。

元来生气ありといふことは非難せし言葉ならで誉し言葉なり、御身は死物の如しといへば誰も心地悪しかるべし、これに反して御身は活物（かつぶつ）なり生气ありといへば心地悪しからざるべし、唯僅かに意の一字を加へてこれをなまいきと読むときは誉し言葉に聞こへぬこそ不思議なれ。

とし子は、読めない書物を読めるような振りをし、世の時事を分かりきった風

を為し、受け売りの議論を振りかざし、熟慮せずに雷同し、自分が教育を受けたからといって無学のをを嘲弄し、都会の軽薄な風習に染まって父兄郷党を笑う者こそが、いわゆる「生意気」であると述べている。真にこれらのことができる者は、「生意気」ではなく、「生气あるもの」なのである。

また、「お転婆」については、明治24年、新任の女子高等師範学校長、細川潤二郎が新聞紙上で「女子師範学校卒業生がお転婆の風あるは実に止むを得ざる所にして苟くも此の校の存在する限りは所謂お転婆風の弊害は遂に匡正し難きものと諦めざる可からず」と発言した。森文部大臣となつてからは女学伸張に力を入れ、高等女学校が保護されるようになったが、このことが逆に女学生の醜聞を生むことになった。この醜聞が話題となった時期に、保守主義といわれる細川が校長としての女子教育意見を公人に聞かせ、それが複数の新聞に掲載されたものである。この発言の要旨は、「世の中の女子教育に対する非難はお転婆風を嫌うにあるようだが、女子高等師範学校に入れば、監督の目も父兄には及ばず行儀作法も乱れがちで、卒業後5年は結婚せず教師として仕事に従事する結果、優美の婦徳を欠くこともある。お転婆風になるのも仕方なく、今後は努めてこれを矯正するが、非難を減ずることはできても消滅させることはできない」というものである。細川にしてみれば女学生を弁護したともとれなくはないこの発言は、『女学雑誌』で鋭く批判されている。

教授せしむるが故にお転婆となると云はゞ、女教員を廃するに若かず、女教員を廃せざる可からずとせば先づ女子高等師範学校を廃するに若かず、而して校長となり如此其自己の教育に不信用ならば、先づ自ら其職を辞するに若かざる也。(中略) 政府の女学校に於て、お転婆を養成するより外に感化力なしと云ふか、(中略) 誤報なるべし、其の速かに正誤されんことを待つ。

(「お転婆」『女学雑誌』281号、明治24年)

これについては、次号の社説で改めて取り上げられ、「生意気」同様、その言葉の持つ意味をも問われている。

所謂お転婆とは何もの、謂ぞ。凡そ従来閉居隠伏して只だ動かざる以て優美なりと称したらんほどのものは、文明の氣に触れて活発々の態を新たに奏するとき、常に軽率、出過、生意気など云へる悪評を蒙むらずと云ふとなし。

(「お転婆排斥主義とは何ものぞ」『女学雑誌』282号、明治24年)

「生意気」にせよ「お転婆」にせよ、言葉のイメージが先行し、それによって女学生への評価も一括りにされることに、『女学雑誌』の投稿者たちは反論した。そもそも世間の抱いている女学生のイメージは、どこから出発しているのか。教育を受けたいと望む女子はいたが、女学校という機関を作り出したのは教育者たちである。出発点としては、教育方針は言うまでもなく、服装、髪型でさえも彼らの先導したものであり、女学生が自ら提案して定着したのではない。女学生たちはまず与えられたものを受け取りながら、その中で次第に自らの欲求に目覚めていくのである。イメージが形成されていくことについて、『女学雑誌』には以下のような文章も掲載されている。

西洋風流行のときは、教場の隣に踏舞さえ、洋服を着用させ、束髪をさせておきながら、保守流行となればお転婆排斥をとえ、体操も懸念する。

(「宣教師派女学校に一策を献ず」『女学雑誌』327号、明治25年)

ここでは、政府の女学校が時流に乗り、流行と共に方針を変えて、一貫した思想や精神がないために女学生は困惑し、このことによってまた彼女たちに対するマイナスイメージも作り上げられることが指摘されている。

文学における表現

次に、女学を推進するという特徴を持った『女学雑誌』を離れて、小説の中で「生意気」、「お転婆」がどのように扱われているかを概観してみよう。

まず「生意気」、「お転婆」という評価を悔しがる女学生を描いたものが見られる。『女学雑誌』に見られたのと同様、方針を作っておきながら、いざ女学生が行動を始めると勝手な批評が飛び交うことに対して納得できない心の内を女学生の口から語らせている。

男は憎い^{おこ}動もすると生意気と一口に云消して女の身分を底の底へ押し付けて置かうとは自分勝手な事ではないか(中略) 今まで女といふものは御雛様の人形と同じだと思ツた目から見ればこそ少し活発に動く者はオテンバの様に驚く。

(饗庭篁村『藪椿』、明治20年)

また反対に、世間の評価を気にして、その枠からはみ出さないようにしよう

としている女性の発言も見られる。

だって、そんな恥かしい事が出来る物かね、却ってお転馬だと、愛想をつかされますわね。

(忍月居士『因果』、明治22年)

これらは、世間の「生意気」、「お転婆」という評価について反論するか、もしくはそれを受け入れていわゆる「古風」な女性であろうとする若い女性（女学生を含めて）をステレオタイプ化して書いている例である。

しかしながら、「生意気」と「お転婆」は、男性たちにとって常に好ましくないのでではなかった。『一読三嘆当世書生気質』（坪内逍遙、明治18年）では、書生、つまり男子学生の生活ぶりが恋愛を中心に事細かに描かれているが、同時期、男性作家による作品に度々「生意気」な女学生が登場するようになる。

南條の娘なんぞと交際ふもんだから。時々生意気な言を吐くとさ。

(坪内逍遙『妹背かゞみ』、明治19年)

お勢ッ子で沢山だ、婦人のくせにいかん、生意気で。

(二葉亭四迷『浮雲』、明治21年)

前者は女学生と親しくすると女学生でなくとも「生意気」になるという発言、後者は「園田勢子」という名刺を作ろうという女学生に対する発言である。

ここに登場する若い男性たちが女学生に対して苦々しい思いを抱いていたかという、そうではない。小説には若い男性たちが理想の妻について語る場面が度々登場するが、そこには教育、それもどちらかといえば欧化主義の教育を受ける女性を理想として挙げているものが多い。例えば、『窓の月』（饗庭篁村¹⁰）では、英学を修めた眼鏡屋の22歳の息子が、「新聞紙に広告して適当な妻を撰みたく存じます」といって「一 婦人年齢二十年前後にして小学全科を卒業して英学の志し有る者但し縫取編物までの嗜みなくとも普通裁縫の心掛ある者」という条件を挙げている。

また、従順なだけの女性には魅力を感じないと述べているものも見られる。いかにも活動的、外向的な様子が表に現れているのは嫌だと言っている、やはり自分の意思を持っている女性が求められている。

いくら婦人だって柔弱でばかり有ってはいけない。杉田の妹ハ負けるのが

嫌で、そしてまた大人しく見えるとか…どうも美しい気象の婦人らしいなア。

(美妙齋主人『花ぐるま』、明治21～22年)

一方、同時期の女性による女学生を描いた小説と言えば、『藪の鶯』（三宅花圃、明治21年）と『婦女の鑑』（木村曙、明治21年）がまず挙げられるだろう。¹¹ これらの作品については作家自身が女学生であったという特徴もある。その他に、『許嫁の縁』（秋月女史、明治21年）、『胸のおもひ』（竹柏園女史、明治22年）などが挙げられる。

『藪の鶯』については、平田（1999）¹²の他、いくつかの研究で、西洋型教育を受けた女性に幸せな結末が用意されておらず、従来いわゆる「日本的な女性」の勝利を描いているという点が指摘されているが、「生意気」、「お転婆」という言葉の観点から見ても、「温順で伶俐で生き気がないから感心サ。」などといった科白があり、保守的な部分が見られる。また以下の科白では、「わるい風」である「生きき」は、「西洋」の影響を受けることによって作られてしまうという考え方を表している。

(前略) 明治五六年頃には。女の風俗が大そうわるくなつて。(中略) 何か口で生ききな梗概なことをいつて。誠にわるい風ださうでしたが。此頃大分直つてきたと思ふと。又西洋では女をたつとぶとか何とかいふことをきいて。少し跡もどりになりさうだといふ事ですから。今の女生徒は大責任が有のでムリ升と。……

『胸のおもひ』にも同様に、「西洋好きな女性」（種子）対「日本的な女性」（露子）という構図が見られ、ここでもやはり男性に求められているのは後者のタイプである。男性作家の場合とは逆に、女性自身（＝作家）が、男性はどのような女性を理想としているのかを想定して、男性の科白として語らせているわけであるが、いかにも西洋風である女性は敬遠されている。

(種子について)

一体が西洋好で私にはむかないが……あの美はしい容貌……

(露子について)

露子だつて容貌は劣りはせんし……親だと云ても名古屋では国立銀行の頭取だから……家事経済も十分学んだし、文学の思想もあるし、英学も……

成程英学などは露子嬢と一所にあの英和女学校を卒業して随分出来るが……だが種子嬢は非常に西洋好で、君とは性質が違ふから到底真正の愛は……苦楽を共にすると云には不

(以上、竹栢園女史『胸のおもひ』、明治22年)

女性の容貌が表立って重要視され始めた¹³ことも新しい特徴と言えようが、ここでは英学を学んでいることが理想の妻の条件に入れられている。これは、新しく女性に求められるようになった点ではあるが、しかし、西洋好きでは困ると言う。西洋好きでは性格が合わず、苦楽を共にできないと言う。

では、苦楽を共にできる人とはどのような女性かと言うと、秀雄の母親の「人品もよし温良い上に学問も出来るから丁度秀のには……あれならば梅園文学士の妻といはれてもはづかしくはない。」という言葉が、これを端的に表している。教育を受けた男性の妻として釣り合いがとれるような学歴も必要だが、「おとなし」くなくてはならない。『胸のおもひ』でも、露子を指して「ほんとに貴嬢はお従順くツてよ。」という科白もある。また、『許嫁の縁』でも、幸せをつかむ女主人公を指して「彼の人は温順すなはなる人なりや」と述べられている。こういった女性ならば、男性に

友としては良き友なり、妻としては良き妻なり

(秋月女史『許嫁の縁』、明治21年)

と言わせることができるのである。¹⁴

「生意気」・「お転婆」から「活発」へ

このように、この時期に女性によって書かれた小説の中の女学生は、「生意気」、「お転婆」という言葉に関しては、世間の評価に対して声を上げて反論するよりは、常に男性の目を意識し、男性に好かれる女学生像の枠に身を収めようとするかのようである。¹⁵しかし先に述べたように、男性が、女学生を含めた若い女性の「生意気」で「お転婆」な部分に魅力を感じていたことは事実である。

ここでもう一度、言葉の持つ原義に立ち戻ってみると、「生意気」は「いきがる」という意味であるが、「いきがる」の「いき」は、「意気」と「粹」のふたつに考えられる。前者は「意気地」とか「覚悟」という女性の心持、後者は

「野暮」の反対としての「粹」として、いずれも江戸時代から女性、特に玄人女性の魅力を表す言葉となっている。これに「生(なま)」という中途半端さを表す言葉をつけて、女学生を批判しているわけである。

佐伯順子は、『「色」と「愛」の比較文化史』の中で、男女の関係が「色」から「恋愛(ラブ)」に移っていく経緯をたどり、男性が恋愛相手として素人女性を扱うことの難しさを小説の中から洗い出した。女学生は、芸者や遊女に替わって登場した、近代教育を受けた新時代の理想の女性であり、ここに知的活動・西洋文明を媒介とする男女交際が始まる。しかし、この新しい男女交際は現実離れた夢に陥る危険性を含み、男性は芸者や遊女などのいわゆる玄人以外の女性を、同等の人間として尊重しつつまた恋の対象として扱うということに難儀していたのである。

女学生を結婚相手、恋愛相手として見るようになった理由には、男性自身が教育を受け洋行などもするようになると、それに見合った女性、理解してくれる女性を求めるようになったということも挙げられるが、何より自分の欲求を主張し活動的に行動する女性の姿に新鮮な魅力を感じたということが大きいであろう。この部分では、従来の恋愛対象であった玄人女性と、魅力を重ね合わせていた部分が大きいのではないかと考えられる。

『当世書生氣質』において書生の恋愛相手として登場するのは玄人女性であるが、彼女たちに対して女学生と同様の「生意気」、「お転婆」という表現が多く使用されている。例えば、弁吉という芸妓は「頗るのお転婆キャット」と呼ばれる。兒鳥に「おいらん新聞がきましたヨ」と新聞が投げ込まれるのを見た書生は「ヤ生意気に絵のない新聞をとるうちがをかしい。読売新聞たア。イヤに素人じみるじやアないか。」などと冷やかす。小豊は14、5歳の白首連であるが、身の振る舞いが「お転婆娘」と評されるほか、「リイベン〔恋着〕したツて無効ですものを」と外来語を使用するのを受けて、書生に「生意気な言語をしつて居やアがる。」と驚かれる。

また小豊に関して、

俗にいふお転婆なれども。彼女ハ活発だ。などといつて。書生連によるこ
 ばるゝ小娘なり。

(坪内逍遙『一読三嘆 当世書生氣質』、明治18年)

という記述がある。この「活発」という言葉は、実は「生意気」、「お転婆」に代わって、女学生の動的な部分をマイナスイメージを与えずに表現しようとする言葉である。

文明の気に触れて活発々の態を新たに奏するとき、常に軽率、出過、生意気など云へる悪評を蒙むらずと云ふとなし。

(「お転婆排斥主義とは何ものぞ」『女学雑誌』282号、明治24年)

今まで女といふものは御雛様の人形と同じだと思つた目から見ればこそ少し活発に動く者はオテンバの様に驚く。

(饗庭篁村『藪椿』、明治20年)

とし子の「生意気論」には、女学生を「生意気」ではなく「生氣あるもの」として表現すべきであるという説が見られたが、「活発」という言葉もこれとほぼ同意義で使用されている。前出の『梅香女史の傳』の梅は、男女平等の実現を志し学問に励むような女性であり、世間の評価からすれば「生意気」に分類されうが、ここでは以下のように描写されている。

丈夫にも劣らぬほど活発にして慷慨の氣象面にあらはるゝ

(月の舎主人『梅香女史の傳』、明治18~19年)

他の多くの小説で、活動的な女学生に不幸な結末が用意されていたのに比べ、梅には成功の可能性を残している。この点から見ても、女性の動的な部分を肯定的に捉え、それを「活発」という言葉で表しているのがわかる。

明治21年に『女学雑誌』に掲載された「女学生論」(星野光太、132、133、137、138号)でも、「からだ健康にして精神の活発なる」ことの重要性が説かれているように、「活発」という言葉は、女学生の「生意気」・「お転婆」のイメージを打ち消し、動的な魅力を印象づけるためにさかんに使用された。そのため、逆に、「軽薄と云はるゝ事なく、天晴れ才女なりと称せられ、乱暴(俗におてんば)と評せらるゝ代りに活発なりとたゝへられぬ」(雲峰子『浮雲胸』、明治24年)とあるように、言葉の小細工で「はしたない女性」のイメージを「活動的な女性」のイメージに切り替えようとする風潮を揶揄するような表現も見られるようになるほどである。「生意気」「お転婆」「活発」という言葉を通して女学生の動的な部分を取りざたされたが、結局のところ、女学生を導こうとする教育者、女学生を恋愛相手として見る男性、いずれの立場からしても、この女学生の動的な部分に魅力を認めていたのだということができよう。

外来語表現へ

しかしながら、男性たちが見るからに欧化主義に染まった女学生は好まなかったのと同様に、教育者たちの側にもこのような女学生の魅力の容認には枠組みがあった。先の「生意気論」の中でとし子は、「なまいきならざるの女学生のためには泣いてこれが冤を訴へたき程なり。」と述べながら、しかしこれらの評価は女学生を善き道に導こうとするものなので、この評に激して無作法な振舞言語のないように期待する、と付け加えることを忘れていない。また、明治23年には「心せよ、今日の女学生」（碓氷山人『女学雑誌』239号）と題し、「女学生にして学問を修めたるが為めに軽躁、浮薄、不従順、生意気等の悪風に陥るは素より不可なり、されど学問すると同時に尚美德を養ふを得、亦学問の効用をも世に示すを得ば女権の伸張期して待べきのみ、(中略)女学生が従順温容以て学問に勉むべきをすゝむ」という文も掲載されている。

特に欧化主義衰退後は、従来の女礼を身につけた女性と比較して女学生を批判する声が高くなり、「たしなみ」という言葉が頻繁に女学生に向けられるようになる。「たしなみ」とは、「日頃の心がけ。そのものとしての、立場としての心得。用意。覚悟。」を意味する。この「覚悟」という意味は、女学生に、ただ従うのではなく自分自身を見据え信念を持つべきということを示唆する上で重要となる。古来の女礼に価値を見出してはいるものの、開化以前の価値観に逆戻りするのではないことを表明しなければならない。

優しき乙女の『たしなみ』を見て、言ひがたきの美に感ずること切りなり。
(「優しき覚悟」『女学雑誌』346号、明治26年)

また、前出の『女と男の日本語辞典』には、「男気」に対して「女気」という表現が存在しないことが述べられているが、この時期の小説の中に「乙女気」という言葉が見られる。

乙女気とは大丈夫の廉恥の心に似たり。寸毫の節義を曲げんよりは万斥の重を担ふて圧死せらるゝを尚軽しとするは大丈夫の事なり。麗はしき動作をたゞならぬたしなみとして、真美の態を汚すを恥るは、乙女子の用心なり。(中略) 乙女気は女性特有の一種の廉恥心なり。

(是空子「流の葦」『女学雑誌』291号、明治24年)

女学生に期待される「たしなみ」とは、男性の「覚悟」にも匹敵する強い意志を必要とし、なおかつ女性特有の優しさを備えたものということになる。

さらに、古来の女礼との区別を強調するために、「デリケシー（デリカシー）」という外来語が頻繁に使用されるようになることも注目すべき点である。『女学雑誌』では、「女のデリケシー（恥、つゝしみ、覚悟）」（明治29年）、「デリケシー＝女子のたしなみ、心がけ」（明治29年）というように、「たしなみ」、「覚悟」、「デリケシー」を同位置において使用している。

これに伴い、女性の魅力も外来語で表現されるようになる。

モーラル、ビュチー（特性の美）の自から面ざしに発し、……愛嬌（チャーム）の溢るる計りなるを略ぼ理想的に近しとす。

（『婚事雑感』『女学雑誌』330号、明治25年）

西洋に在つては之れ其の婦女子が男子の渴望を吸引する愛嬌（チャーム）の一つとなれるものと云ふべきか

（『妻を扱ふ東洋西洋の相違ふ乎』『女学雑誌』469号、明治31年）

チャームは「愛嬌」、「優美」など様々な意味として使用されているが、特に「愛嬌」という言葉は、多くの小説で女主人公の魅力を表すのに多く使用されている。男子に盲従する女（＝古風な女）、学問をひけらかすだけの女（＝西洋かぶれの女）を脱して、毅然とした内面の美しさを持つ女性を理想像として提示するために、「チャーム」という外来語の持つ響きを取り入れていったと考えられる。

おわりに

明治20年前後の女学生を表現する言葉を通して、周囲がどのように女学生を扱い、あるいは導こうとしたかをたどった。女学生は結婚予備軍の女性として常に注目されるべき存在であり、そのイメージが様々な作られ、評価されたことは当然とも言える。

女学生自身の声については、本稿ではまだ、女学生出身作家による作品から拾うに留まり、今後は彼女たち自身が作られた枠組みの中でどのように独自の文化を広げていくかを考察する必要がある。特に、外来語は書生にも女学生にも好んで使われており、教育者たちが使用したものや社会背景との関わりを見

ながら、浸透していく様を見ていきたい。

注

- 1 『日本語学』 vol.23、p.9。
- 2 『日本国語大辞典』（小学館、2000～2002）参照。
- 3 明治18年には高等女学校生徒数は616人、女学生数が飛躍的な伸びをみせるのは明治32年に高等女学校令が發布されてからである。
- 4 『女学雑誌』の前身『女学新誌』は明治17年の創刊。
- 5 女学とは、「女性の地位を向上させ、権利を伸長し、女性を幸福にする学問」を指している。
- 6 中山（1998）は、女学生を扱った巖本善治の小説について、「典型的な二タイプの女学生を描写、理想と現実の迷いが展開」、「道徳的、目的主義的な巖本の小説が、女学生小説登場の前史」と述べている。
- 7 学校教育の推進は、教育を受けた子どもと受けていない親の考え方に大きな差を生むことになった。『新磨 妹背かゞみ』（坪内逍遙、明治19年1～9月）では、「必竟親々は前代の人なり。随つて其主義も前代の物なり。子供等は当代明治の人なり。故に其心も当世形気。かはつた教育をば受たる事ゆえ。いつしか我しらず。新主義に傾き。中にも生意気なる先走は。男女同権とか。親子の義務とか。間々嘯違への議論さへ唱へて。親父をへこましたを自慢兒に喋々人前にて唱ふもありけり。」という描写が見られる。小説において結婚をめぐる親とのやりとりを子の側から男女別に見ると、息子が母親の意見に影響される傾向があるのに対し（『妹背かゞみ』、『胸のおもひ』、『藪椿』など）、娘は母親を軽蔑したり、親の意見とは相容れないものと思切ることにより、自由結婚を目指す、独身主義を宣言するなど様々な行動が見られる（『藪の鶯』、『婦女の鑑』など）。
- 8 中島湘煙（俊子）のこと。創刊翌年から『女学雑誌』に寄稿し続け、「生意気論」（明治23年）寄稿時は30歳。
- 9 女学生批判に反論を加える『女学雑誌』もまた教育の先導者たちによる雑誌であり、女学生のイメージ形成に大きな影響を及ぼしていると言える。服装、髪型に関する記事も多い。例えば、束髪に関しては明治18年から数号にわたって図入りで編み方や飾りに用いる物などを掲載している。なお、女学生の風俗については、本田和子の研究に詳しい。
- 10 『小説むら竹 第一集』（春陽堂、明治24年）所収のものを引用した。

- 11 この時期の女性作家の作品については平田（1999）に詳しい。
- 12 平田は、この作品について、西欧心酔に批判的であり、女の本道イコール結婚という支配的ディスコースが繰り返されると述べている。
- 13 沢山美果子『『結婚の条件』の近代』（小玉美意子、人間文化研究会編『美女のイメージ』（世界思想社、1996年）に所収）では、女性の容貌が結婚の条件として重要視されていく過程が述べられている。
- 14 『女学雑誌』中の小説においては、男女がお互いに交際相手を「友」として位置づけるのを理想とする場面が多く見られ、「朋友」という言葉が使用されている。肉の世界は排除し、精神的な相互理解を目指そうとするものであるが、ここには単なる尊敬と友情にとどまらない、異性に対する特別な感情も含まれているようである。
- 15 ただし理想の夫像は掲げている。男性が求める理想の妻の姿が変化してきたように、女学生もまた相手の容貌、学歴などの好みを述べている点は、男性側の考え方や従来の未婚女性の姿と対比して追求する必要がある。

参考文献

- 饗庭篁村「窓の月」『小説むら竹 第一集』（春陽堂、1892）
- 九鬼周造『いきの構造』（講談社学術文庫、2003）
- 小関三平「明治の「生意気娘」たち—女学生と小説（上）（中）（下）」『女性学評論 9、10、11』（神戸女学院大学女性学インスティテュート、1995.3～1997.3）
- 佐伯順子『「色」と「愛」の比較文化史』（岩波書店、1998）
- 佐々木瑞枝『『女と男の日本語辞典』の輪郭—収録語録の意味による分類』『日本語学』vol.23（明治書院、2004.6）
- 佐々木瑞枝『女と男の日本語辞典』上下（東京堂出版、2000、2003）
- 中山清美「女学生作家の登場—『藪の鶯』、『婦女の鑑』、巖本善治の小説を中心に—」『名古屋近代文学研究』16（名古屋近代文学研究会、1998）
- 日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典』（小学館、2000～2002）
- 平田由美『女性表現の明治史—樋口一葉以前—』（岩波書店、1999）
- 深谷昌志『増補 良妻賢母主義の教育』（黎明書房、1981）
- 本田和子「女学生の系譜」『ユリイカ』21(1)–(15)（青土社、1989.1～12）
- 『女学雑誌』1号～526号（女学雑誌社、1885.7～1904.2）

『都の花』第1巻1号～第3巻14号（金港堂、1889.11～1890.5）